

未|来|を|拓|く

ス ポ ー ツ 社 会 学

山田 明 編



執筆者一覧

■ 編集

やまだ あきら
山田 明 九州共立大学

■ 執筆者一覧 (五十音順)

いとう きよし 伊藤 潔	富士大学……………	第4章
おおはし みつなり 大橋 充典	久留米大学……………	第11章
こまる まさる 小丸 超	駿河台大学……………	第2章・COLUMN 1
さとう よう 佐藤 洋	明星大学……………	第3章
すがや みさと 菅谷美沙都	上武大学……………	COLUMN 4
たけざわ えな 竹澤 恵菜	宮崎産業経営大学……………	第1章
ながまつ まさき 永松 昌樹	日本文理大学……………	第5章・COLUMN 2
のがみ れいこ 野上 玲子	日本女子大学……………	第8章
はた のけいご 波多野圭吾	神奈川大学……………	第9章・COLUMN 3
はなだ みちこ 花田 道子	九州共立大学……………	第10章
はまた ゆうすけ 浜田 雄介	京都産業大学……………	第12章
やまうち あきひろ 山内 章裕	大阪大谷大学……………	第6章
やまだ あきら 山田 明	九州共立大学……………	序章・第7章・COLUMN 5

はじめに

近代スポーツは、危機的状況にあります。なぜなら、遊びの要素を持つ身体活動としてのスポーツに、病理現象が絶えないからです。日本では、2018（平成30）年に集中して発覚した、女子レスリング界でのパワーハラスメント、大学の指導者の指示によるアメリカンフットボールの悪質タックル、ボクシング界や体操界でのパワーハラスメントや組織のコンプライアンスの欠如など、マスコミを賑わせたのは記憶に新しいことです。また、世界のスポーツに目を向けてみると、オリンピックや国際大会でのドーピング問題やスポーツ競技に関わる政治的な問題が後を絶ちません。スポーツに関わる問題は、以前からその問題性を指摘されていたにもかかわらず、何ら改善されないまま現在に至っているのです。2020（令和2）年に東京で開催される予定のオリンピック・パラリンピックを控えた今こそ、スポーツを批判的に問い直し、その処方箋を明らかにするときでしょう。そうでなければ、スポーツはその文化性を失い、単なる商業的イベントに陥ることになります。

一方、価値観の多様化を背景に生涯スポーツの時代を反映した手軽に楽しめるニュースポーツ、エクストリームスポーツやエンデュランススポーツなどの困難性や耐久性を追求するスポーツなど、新たなスポーツも人気を博しています。2024（令和6）年のオリンピック・パラリンピックに採択される種目として、アメリカ発祥の民族的ダンスから発展したブレイクダンスもその候補にあがっています。スポーツの持つ本来の身体性や文化性が生かされたスポーツシーンを期待したいものです。

さて本書は、スポーツの危機感を批判的に捉え、新しいスポーツの価値観を構想し、その課題を乗り越え、スポーツの未来に希望を託すことをテーマに、スポーツ社会学研究者の英知を結集した書籍です。章立ては、「成果主義の未来を問うースポーツと教育ー」「商業主義の未来を問うースポーツと経済ー」「グローバリゼーションの未来を問うースポーツと政治ー」「新しいスポーツの未来を問う」の4部構成とし、1部当たり3章の各論で内容を論じることになりました（全12章）。また、近年注目されているスポーツ事象として5つのコラムを設けました（身体論・スポーツファンの社会学・ジェンダー論・スポーツツーリズム・eスポーツ論）。スポーツをめぐる現代的諸課題の検討を通して、未来志向的なスポーツ社会学の構築を目指します。

ここで、本書の特徴を5点述べておきます。

- ①本書のコンセプトである「スポーツにおける未来の可能性を考える」という企画意図に沿った明確な章立てとなっており、スポーツの未来をイメージしやす

い構成にしています。

- ②スポーツと成果主義（教育）・商業主義（経済）・グローバリゼーション（政治）との関係性からスポーツ社会学を考えるという斬新な章立てになっており、これらをふまえて新しいスポーツの形を問うことで、スポーツの未来を拓くリアル感を出しています。
- ③本書は12の章で構成されていますが、それぞれ完結した内容となっており、単なるコラム的な説明文（紹介文）に陥ることなく、質の高い内容を有しています。教科書として編集していますが、スポーツ社会学の先駆的論文集の意味も持っています。
- ④各執筆者は、本書の全体的コンセプトを把握したうえで、かつ各研究領域の現状をふまえ、スポーツの未来について示唆し、考える題材を提供することを共通認識としています。
- ⑤本書はテキストとして活用してもらうことを想定した書籍（教科書）であり、教員も学生も授業で活用しやすいように、各章が「導入・展開・まとめ」という流れのある構成にしています。

本書は以上の点に特徴を持っています。本書をスポーツ社会学を学ぶ学生の方やスポーツに興味・関心のあるすべての方に読んでいただき、スポーツの危機感を批判的に捉え、新しいスポーツの価値観を構想し、その課題を乗り越え、スポーツの未来に希望を託す意識を共有していただきたいと思います。

結びに当たり、編者が示した企画趣旨に賛同し、多忙なかたでご執筆をいただいた著者の方々に、心より感謝を申し上げます。また、本書の出版をご提案いただきました株式会社みらいの企画部企画営業課の稲葉高士氏、企画段階から出版まで総合的なご助言をいただきました企画部企画営業課の吉村寿夫氏、編集過程を通してご指示をいただきました企画部企画編集課の西尾敦氏には大変お世話になりました。執筆者を代表してお礼を申し上げます。

2020年2月

編者 山田 明

目次

はじめに

序* スポーツ社会学の未来を問う 9

1. スポーツへの期待と社会的病理 9
2. スポーツ社会学で何を学ぶのか 10
3. 本書の構成 12

成果主義の未来を問う—スポーツと教育—

第1* スポーツの本質と文化としてのスポーツ 16

- 1 「スポーツ」とは何か 16
 1. 「スポーツ」の語源と意味の変遷 16
 2. 国際共通語としてのスポーツ 16
- 2 遊びの概念 18
 1. ホイジंगाにおける遊びの概念 18
 2. カイヨワにおける遊びの概念 20
- 3 遊びとスポーツ 21
- 4 文化としてのスポーツ 22
 1. スポーツ文化の捉え方 22
 2. スポーツがもたらす影響力 23
 3. スポーツ文化の特徴 24
 4. スポーツ文化の構成要素 24

第2* スポーツ指導の社会学—暴力的指導を超えて— 27

- 1 スポーツ界における暴力的指導の問題 27
 1. 暴力的指導の実態 27
 2. スポーツ指導の特殊性 29
- 2 体罰の社会学 30
 1. 体罰と社会関係 30
 2. 体罰と社会構造 31
- 3 暴力的指導を超えて 33
 1. 2つの指導モデル 33
 2. 超社会化の指導—スポーツ指導の未来に向けて— 34

第3* スポーツの「キャリア」を考える 37

- 1 スポーツの世界で生きる 37
 1. 「教育」における文脈と「スポーツ」における文脈 37
 2. 社会的施策とアスリートのキャリアについて 38
 3. 競技生活における「生き方」と「困難」の関係 39
- 2 スポーツの「キャリア」選択 40

1. アスリートはどのような「キャリア」を通るのか 40
2. 競技人生と「セカンドキャリア」論 41
3. 競技生活と「デュアルキャリア」論 42
- 3 私たちはどのような「キャリア」を積むのか 44
 1. 何のため・誰のための「キャリア」なのか 44
 2. アスリートにみる「競技社会で生きる」ということ 45
 3. スポーツの「キャリア」から何を学ぶのか 45

◆COLUMN 1 47

商業主義の未来を問う—スポーツと経済—



■4 ■ わが国におけるスポーツアマチュアリズムの未来的展望 50

- 1 スポーツにおけるアマチュアリズムとは何か 50
 1. アマチュアリズムの起源と歴史 50
 2. 現在のアマチュアリズム 51
- 2 プロフェッショナリズムとアマチュアリズムの連動性 52
 1. プロスポーツからアマチュアスポーツへの恩恵 52
 2. プロ化と商業主義のスポーツへの弊害 54
- 3 武道および開発途上国支援からアマチュアリズムを考える 55
 1. わが国の伝統文化である武道と競技スポーツの違い 55
 2. 柔道精神とアマチュアリズム 56
 3. スポーツによる開発途上国支援とアマチュアリズム 57

■5 ■ スポーツ社会経済学とスポーツイベント論 60

- 1 スポーツの社会と経済 60
 1. スポーツの経済的価値 60
 2. 健康経営の経済効果 62
- 2 スポーツイベントの社会経済学 65
 1. イベントの経済的価値 65
 2. ボランティアの経済性 66

■6 ■ メディアスポーツ論 71

- 1 スポーツに始まるメディア革命 71
 1. 情報の表象とスポーツ 71
 2. 情報・メディア・コミュニケーション技術の革命 74
- 2 スポーツと情報メディアテクノロジーの新境地 77
 1. オリンピックとサッカーワールドカップの国際化・商業化 77
 2. 大会規模拡大に伴う情報メディアとスポンサーシップの発展 78

◆COLUMN 2 87

第7章 スポーツにおけるポスト・グローバリゼーションの未来
—ラグビー王国ニュージーランド代表と先住民マオリの関係性を読み解く— 90

- 1 世界最強のオールブラックス 90
 1. ラグビー王国ニュージーランド 90
 2. ニュージーランド・ラグビー小史 92
 3. オールブラックスの文化および哲学 93
- 2 スポーツにおけるグローバリゼーションとポスト・グローバリゼーション 94
 1. グローバリゼーション研究 94
 2. グローバルとローカルの関係性 94
 3. スポーツにおけるグローバリゼーション 95
- 3 文化人類学にみる狩猟採集社会 96
 1. 文化人類学の視点でみる狩猟採集社会 96
 2. ニュージーランドの先住民マオリ 96
- 4 オールブラックスとマオリの狩猟採集文化との関係性 97
 1. マオリの生業の歴史と精神文化 97
 2. オールブラックスの戦術および戦略の特徴—マオリの文化的影響— 98
 3. ローカルを基盤としたグローバルな存在“オールブラックス” 99

第8章 オリンピックとナショナリズム 101

- 1 オリンピックにおけるナショナリズムの現状と課題 101
 1. ナショナリズムの現状 101
 2. ナショナリズムとは何か 102
 3. ナショナリズムを問う必要性 103
- 2 オリンピックの理念とコスモポリタニズム 104
 1. オリンピズムとオリンピック・ムーブメント 104
 2. ケーベルタンが理想とするインターナショナリズムとは 106
 3. オリンピック理念（精神）の再検討 106
- 3 オリンピックの未来 108

第9章 地域スポーツ—スポーツと官民連携— 110

- 1 日本における地域スポーツの歩み 110
 1. 地域スポーツ振興に関する政策等の変遷 110
 2. 地域におけるスポーツの新たな役割 112
- 2 スポーツにおける官民連携の形 115
 1. 新しい公共 115
 2. PPP（官民連携） 115
 3. 学校運動部活動と部活動指導員制度 116
 4. スポーツ施設とPFI方式・指定管理者制度 117
- 3 地域スポーツの未来 118

◆COLUMN 3 120

4

※10※ 障がい者スポーツ論—アダプテッドの視点からみた生涯スポーツ— 124

- 1 障がい者におけるスポーツの意義と理念 124
 1. 障がい者スポーツとは 124
 2. 障がい者スポーツの意義 125
 3. 障がい者スポーツの理念 126
- 2 持続可能な障がい者のスポーツの普及のために 128
 1. 障がい者のスポーツ活動の現状 128
 2. 障がい者スポーツのための環境整備 128
- 3 アダプテッド・スポーツ支援が社会に与える影響 129
 1. 発達障がい児も楽しめるスポーツ支援を目指して 129
 2. 発達障がい児一人ひとりに対応した支援および指導の工夫と実際 130
 3. アダプテッド・スポーツとノーマライゼーション社会への期待 131

※11※ エクストリームスポーツ 134

- 1 接近—エクストリームスポーツの実態— 134
 1. 近代以降のスポーツ 134
 2. オルタナティブなスポーツと勝敗（生死） 135
 3. 日本のスポーツにおける伝統と逸脱 136
- 2 思考—なぜ、没頭できるのか— 139
 1. フローへの侵入 139
 2. “超” 目的論的動機づけ 140
- 3 眼差し—英雄か狂人か— 142
 1. 演技者としての超人たち 142
 2. “映える” ことの意味 142
 3. 共有され、拡張される超人たち 144

※12※ エンデュランススポーツの社会学 146

- 1 苦しさと確かさ 146
 1. 苦しさに向かう 146
 2. 確かさを求める 147
- 2 2つの確かさ 148
 1. 達成の確かさ 148
 2. 存在の確かさ 150
- 3 苦しきの可能性 151
 1. 確かさへの回り道 151
 2. 苦しきがつなぐ 152

◆COLUMN 4 155

◆COLUMN 5 157

序

章

スポーツ社会学の未来を問う

1. スポーツへの期待と社会的病理

この章を執筆している2019（令和元）年12月現在、今年もスポーツ界から国民を感動させる明るいニュースが数多く発信された。例えば、八村塁選手のアメリカNBAデビュー、バドミントン世界選手権での男子シングルス桃田堅斗選手と女子ダブルス松本麻佑・永原和可那ペアの大会連覇、9～11月の長期開催となったラグビーワールドカップ日本大会での初のベスト8進出、バレーボールや卓球のワールドカップでの上位入賞など、日本人選手が世界的規模の大会で健闘した。2020（同2）年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックを前に、スポーツの話題で日本が沸き立つ1年でもあった。

しかし、明るいニュースと同時にスポーツをめぐる病理的現象も相変わらず起こっている。いくつか紹介しよう。第一は、パワーハラスメントの問題である。10月にサッカーJリーグ湘南ベルマーレの曹貴裁監督が、クラブ関係者や選手へのパワハラを認め退団した。12月には全日本テコンドー協会の金原昇会長が、同会長と協会のパワハラを理由とした強化合宿ボイコット事件（9月の合宿に28名中26名が不参加）を受け、会長職を退くと会見した。選手側は、同協会の組織的な環境改善を求めている。

第二は、体罰および暴力事件である。アマチュアスポーツでは、4月に強豪として知られる兵庫県尼崎市立尼崎高校の男子バレーボール部で、部員がコーチに暴力を受け一時意識を失い、鼓膜裂傷のけがをする体罰事件が発覚した。10月には、鹿児島県の出水中央高校のサッカー部で、練習中に男性教師が生徒の顔を殴るなどした映像がネット上で拡散した。同サッカー部は、2019（令和元）年の県大会で準優勝した強豪であるが、同監督は9月にも別の生徒を殴り、校長から指導を受けていた。プロスポーツにおいても、6月に広島カープの緒方孝市監督が、横浜DeNA戦で緩慢なプレーをした選手を試合後に平手で複数回叩いた事実が内部報告で発覚した。新聞報道によると「監督の気持ちは理解しており不平不満はない。この問題を大きくしたくない」とのコメントが選手からあった。被害者が我慢すべき問題だと意識しているところにスポーツと暴力の問題の深刻さが現れている。

第三は、禁止薬物の使用やドーピングの問題であり、スポーツにおける社会的

病理の最たるものの一つである。9月には、ラグビー・トップリーグのトヨタ自動車の元選手が現役当時にコカインを所持していたとして、麻薬取締法違反で有罪判決を受けた。同チームの外国人選手から譲り受けたとしているが、薬物所持について罪の意識はなかったという。

これらは、何度も繰り返されている病理的事象の事例であり、スポーツの本質を置き去りにした勝利至上主義に根差す現代的なスポーツの課題である。スポーツは文化であり、人間の生活を豊かにし、社会を向上させるものである。現在は生涯スポーツの時代ともいわれ、スポーツは人間の社会生活にとって重要な存在となった。本書は、スポーツをめぐる諸課題について、スポーツ社会学という学問を通し批判的に検討することで、未来へのスポーツのあり方を問うものである。

2. スポーツ社会学で何を学ぶのか

(1) スポーツ社会学とは

スポーツ社会学とは、スポーツが持つ多様な社会事象について社会的アプローチから分析し、問い直す学問領域である。社会学は、人間の社会的行為と関連付けながら、社会生活・社会組織・社会問題などの仕組みを明らかにしようとする学問であり、現実の課題の解決に寄与する社会科学の一部門である。よってスポーツ社会学とは、社会学の理論的分析手法を活用して、スポーツの役割や機能を検証し改善する学問である。スポーツが、豊かな人生を送るための楽しく自発的で自由な身体活動だとすれば、スポーツ社会学はこれに反する現象を指摘し、改善への見通しを示すことが使命である。

近代スポーツの本質は「遊び」である。「遊び」とは目的に縛られることのない行為であり、それ自らの営みである。ドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラー (Friedrich von Schiller) の言葉に、「人間は遊戯しているときだけ真の人間である」という格言がある。スポーツ社会学は、スポーツという世界共通の文化について現状診断し、建設的な議論をすることを通して改善の見通しを拓く学問である。

スポーツ社会学の目的は、スポーツの文化としての本質（遊び・遊戯・プレイ）（以下「遊び」）への原点回帰、社会の変容と時代のニーズに沿ったスポーツの展開を目指すことである。そのことがスポーツの社会的振興につながり、ひいては持続的社会的構築にも結実する。そして、明らかにしなければならないことは、スポーツと社会の関係性、スポーツと人間の関係性についての知識と理解、スポーツの功罪である。スポーツに関する社会事象についての原因分析、未来志向的な多角的検討を社会学というツールを活用し、批判的・実証的分析を通して課題解決を目指したい。そもそも社会学は、その学問上の性格として一つの正解を導く

というものではない。本書では、21世紀におけるスポーツの多様な社会的機能や役割を問い直し、未来への展望を広い視野で探求する。

(2) スポーツ社会学が検討すべき課題

ここで、スポーツ社会学を通して検討すべき視点を示しておきたい。

第一は、スポーツの大衆化と高度化である。1980年代の生涯学習社会の到来とともに、健康やスポーツがすべての世代に必要とされる時代となった。これは地域スポーツ、生涯スポーツと呼ばれているが、スポーツが身近になり大衆化したのである。併せてアマチュアスポーツやプロスポーツの振興で競技スポーツの高度化も現出した。スポーツの高度化は、勝つことへの強制、いわゆる勝利至上主義につながる結果ともなった。これらスポーツにおける大衆化と高度化という2つの事象の二極化が、現在のスポーツの課題（パワハラ問題・体罰および暴力事件・禁止薬物の使用およびドーピング等）の根幹にあると考えられる。また日本においては、スポーツにおける自由な身体活動という概念と体育という強制を伴う教育が混同される文化的風土の存在も、スポーツの課題を引き起こしている一因とも考えられている。

第二は、スポーツへの関わり方を軸とした視点でみる課題領域である。2010

表序-1 スポーツとの関わり方を軸としたスポーツ社会学の課題領域

スポーツとの関わり方	スポーツ社会学におけるテーマ例
する人	①スポーツ文化 ②禁止薬物・ドーピング ③権利（スポーツ権） ④セカンドキャリア ⑤アマチュアリズム ⑥組織及び集団 パワハラ・ガバナンス ⑦政治的利用 ⑧経済的效果 ⑨商業主義 ⑩ナショナリズム
観る人	①スポーツメディア ②グローバルゼーション ③オリンピック・ワールドカップ
支える人（育てる人）	①教育 ②スポーツマネジメント ③スポーツ政策 ④生涯スポーツ・地域スポーツ ⑤障がい者（パラ）スポーツ

注：スポーツとの関わり方に示した「する人」「観る人」「支える人（育てる人）」の対象は次の通りである。する人（一般大衆、アマチュアスポーツ選手・プロスポーツ選手）、観る人（一般大衆）、支える人〔育てる人〕（教育者、コーチ等技術指導者、ボランティア）。

(平成22)年に策定されたスポーツ立国戦略によると、スポーツへの関わり方として、「する人」「観る人」「支える人(育てる人)」という概念が示されている。これらのスポーツとの関わり方と社会学としての課題との相関について検討することが重要である。具体的検討事例は、表序-1を参照していただきたい。スポーツ社会学がこれらの視点に立ち、具体的な課題を社会学の理論を活用して、一つひとつ丁寧に検討することで、未来志向のスポーツのあり方が見えてくる。

3. 本書の構成

スポーツを文化という視点でみると、文化としてそぐわない社会現象としてのスポーツは批判され変わらざるを得ない。そこにスポーツの未来が期待できる。本書では、スポーツ社会学の使命およびスポーツ社会学が検討すべき視点をふまえ、①成果主義の未来を問うースポーツと教育ー、②商業主義の未来を問うースポーツと経済ー、③グローバル化の未来を問うースポーツと政治ー、④新しいスポーツの未来を問う、の4部構成で課題を検討した。

(1) 成果主義の未来を問うースポーツと教育ー

近代スポーツの根本的な誤りは、自由な身体活動であるスポーツが「遊び」という自由性を喪失したことである。人間は「遊び」という価値観に起源を持つスポーツにおいて、競技や試合に勝つことで名誉・地位・金銭を得ることに価値観を見出した。人間の価値観は十人十色と言われるように多様であり、スポーツに関する価値の選択が可能になったわけである。しかし、過度の勝利至上主義やナショナリズムはスポーツ本来の意味を喪失させ、その自由性を奪ったがゆえに課題が噴出する状況を生み出した。そこで第1部では、「成果主義の未来を問う」というテーマを設定し、スポーツにおける「遊び」の喪失を文化や教育との関係性において検討する。

(2) 商業主義の未来を問うースポーツと経済ー

スポーツにおける商業主義は、現在では、スポーツ産業やスポーツビジネスとしてスポーツの振興に重要な役割を果たしている。例えば、国際オリンピック委員会(IOC)が得た利益は、大会の運営費だけでなく各種競技の普及や幅広いスポーツの振興に活用されている。日本では、スポーツ庁と経済産業省が2016(平成28)年に「スポーツ産業の活性化に向けて」のなかで、2020年東京オリンピック・パラリンピック後を見据えてスポーツで収益を上げ、その収益をスポーツへ再投資する自律的好循環の形成を提言し、スポーツ市場の創出を表明している。しかしバランスを欠いた過度の商業主義は、第1部で検討する「スポーツの成果

主義」とも関連して、スポーツ本来の文化性を失わせることになり、単なる商業イベントに陥ることになるだろう。そこで第2部では、スポーツと経済の視点から「スポーツの商業主義」を検討する。

（3）グローバリゼーションの未来を問うースポーツと政治ー

グローバリゼーションは地域の諸社会がグローバルに一体化する状況をいうが、そこにローカリティをどのように位置付けることができるのだろうか。21世紀の時代は、ますます多様性の世界観が主流となるであろう。例えば、民族スポーツなどのローカルなスポーツが世界の国々で興味・関心が持たれ普及していく過程のなかで、その文化性・歴史性も合わせて受け入れられ、文化が共有されていくことが期待される。そこで第3部では、スポーツにおけるグローバリゼーションとローカルなスポーツの文化的価値の共存についての課題、オリンピックとナショナリズム論、グローバルなスポーツの発展に寄与するローカルな地域スポーツ（新しい公共）という政治的課題を通して、未来のスポーツのあり方を検討する。

（4）新しいスポーツの未来を問う

第4部では、アダプテッドスポーツ、エクストリームスポーツ、エンデュランススポーツなど、近代スポーツでは語り切れない多様性の象徴としてのスポーツについて検討する。このような新しいスポーツと呼ばれる領域は、すべての世代が多様なニーズを通して楽しむことができるスポーツの可能性を秘めている。万人を引きつけるという意味で、未来のスポーツの発展に期待を持つことができる存在である。エクストリームスポーツやエンデュランススポーツの普及については、従来、主催者や活動している人の周辺で成り立っていたマイナーなスポーツであったものが、近年のソーシャルメディアの普及により広範囲で情報共有が可能になったことが大きい。また、「する人」「観る人」「支える人（育てる人）」というスポーツに関わる人の交流が、その促進につながっている事も重要な要因となっている。アダプテッドスポーツについては、2020年東京オリンピック・パラリンピックを控え、障がい者と健常者の枠を取り払った、いわゆるノーマライゼーションの具現化に期待が集まっている。すべての人が楽しみ、競技ができるパラスポーツの普及に見通しが持てるようになってきた。このように第4部では、オルタナティブの視点に立った新たなスポーツシーンを検討する。

A large, bold, black number '1' is centered on the page. To its left, a horizontal dotted line extends from the left edge of the page towards the number. The background features a large, light gray circle on the left side, which overlaps with a white circle on the right side, creating a layered effect against a dark gray background.

1

成果主義の未来を問う
—スポーツと教育—

スポーツの本質と文化としてのスポーツ

● 第1章の学びのポイント ●

本章では、世界共通の文化として存在するスポーツの本質と、それが危機的状況となる現在、私たちには何ができるのかを考える。その際、以下の3点が学びのポイントとなる。

- ・スポーツの根源である「遊び」の概念を知ろう。
- ・スポーツと遊びの関係性を理解し、スポーツに起きている問題点について考えてみよう。
- ・文化としてのスポーツの特徴や社会的役割を理解しよう。

■ 1 「スポーツ」とは何か

1. 「スポーツ」の語源と意味の変遷

私たちは「スポーツ」という言葉を日常のあらゆる場面で見聞きすることがあるが、スポーツを日本語に置き換えるとどのような意味になるだろうか。「運動」はExercise・Fitnessであるし、「身体活動」はPhysical activity、「体育」はPhysical educationであり、スポーツを日本語で一概に表すのは困難である。

スポーツは英語の「sport」に由来する外来語であり、語源はラテン語の「deportare（休養・気晴らし・遊び・娯楽）」の意味から変化した言葉である。図1-1にあるように、スポーツの意味の変遷は、その時代や社会における休養・気晴らし・遊び・娯楽に深く関わっているのである。また、今日のスポーツにおいても、人々や社会がスポーツに求めるものは常に変容し、「スポーツ」という言葉を用いる人々の生活と関わりながらその意味は多義にわたっている。

2. 国際共通語としてのスポーツ

スポーツが日本に入ってきたのは、20世紀前半、明治期の文明開化の時代であ

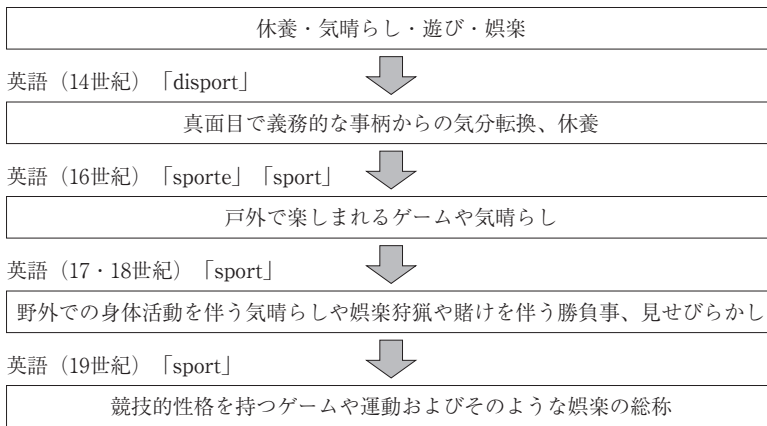


図 1-1 スポーツの意味の変遷

出典：日本スポーツ協会編『公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ』2005年 p.35を一部改変

る。日本は急速に西洋化し、国際交流も活発になったことで、学問や技術とともにスポーツも取り入れられた。特に、高等教育機関を通じて移入され、普及したため、日本のスポーツは教育の一環として結び付ける考え方が強く、極めて体育的な考え方をもち取り入れられたのである。日本がスポーツと教育を関連付け、部活動という日本特有の文化を生み出したように、スポーツは地理的・社会的に拡大することで、一層の多義化を生み出すことになる。当然、そこにはさまざまなスポーツの捉え方・考え方・解釈や価値観が存在し、スポーツの定義・領域に関する問題が提起されたのである。

そこで、国際共通語としてスポーツの定義・領域を提言し、全世界のスポーツの概念を統一するために開かれたのが、1964年の東京オリンピック・スポーツ科学会議である。その後、4年間の検討を重ね、1968年のメキシコオリンピック・スポーツ科学会議にて「スポーツ宣言」が採択された。スポーツ宣言の内容は次の通りである。

①スポーツの定義

スポーツとは、「遊戯の性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動」である。

②スポーツのフェアプレーの強調

フェアプレーのないところには、真のスポーツは存在しない。

ドーピングやさまざまな不正の取り締まりを強化し、公平にスポーツを行う。

③スポーツの多様性を認める

スポーツを単一のカテゴリとして捉えるのは困難であり、学校におけるスポーツ、レジャーにおけるスポーツ、チャンピオンシップにおけるスポーツなどスポーツの多様性を認める。

「スポーツ宣言」によって、国際共通語としてのスポーツの定義が、遊戯性を第一条件にしたことは、当時の日本に大きな影響を与え、軍隊や集団行動の規律の手段とするスポーツ観を一掃させる出来事となった。

その後、スポーツの発展とは別に、健康不安や自由時間の増大などによって、社会的にスポーツの必要性が高まると、1975年の「ヨーロッパ・みんなのスポーツ憲章」によって、スポーツをすることがすべての個人にとっての権利であることがうたわれた。これにより、日本でも1980年代には「みんなのスポーツ (Sport for All)」をキャッチフレーズとし、女性や高齢者を含む一般市民を対象にスポーツ大衆化政策が行われ、「権利としてのスポーツ」が大々的に取り上げられた。

■ 2 遊びの概念

先の「スポーツ宣言」など、さまざまなスポーツの定義のなかにおいて、「遊戯・遊び・プレイ」の性格がスポーツの根本にあることが第一に記されており、遊びこそがスポーツの基本である。遊びをすることに目的はなく、そこに運動の楽しさが内在的にあるのみである。遊びの基礎理論については、現代のスポーツの概念の基盤をつくってきたともいえる代表的な研究者のホイジンガ (J. Huizinga) やカイヨワ (R. Caillois) が、遊びの文化的価値について説いている。ホイジンガは、『ホモ・ルーデンス』のなかで、文化機能としての遊びの役割を明確にし、遊び自体の基本的な性格を分析し、明確に記述した¹⁾。その後、カイヨワによる『遊びと人間』のなかでは、それがさらに細かく検討されている。ここでは、スポーツの基盤となった遊びの考え方について紹介していく。

1. ホイジンガにおける遊びの概念

(1) 遊びから始まる文化

ホイジンガは、「人間とは、ホモ・ルーデンス＝遊ぶ人のことである。人間文化は遊びのなかにおいて、遊びとして発生し、展開してきたのだ」²⁾と主張し、遊びは文化に先行し、あらゆる人間文化は遊びから形成されたものであると説いている。

(2) 遊びの定義

ホイジンガは遊びを、人間行動や文化をつくり出すすべてのものの原点であると主張し、人々を誘い込み夢中にさせるもの、それこそが遊びの持つ楽しさであるとしている。遊びというものは、人々に緊張、喜び、おもしろさを与えるもの

であり、特に「おもしろさ」は、遊びの本質的なものであると定義している。

(3) 遊びの形式的特性

ホイジンガは遊びの形式的特性として、以下の5つをあげている³⁾。

- ①自由な時間に行う自由な行為、活動である。
- ②非日常的な活動である。
- ③利害性のないものである。
- ④時間的・空間的に隔離されたものである。
- ⑤特定のルール of 支配

これらを総合すると、遊びの特性とは、自己啓発的な自由な、どこか日常とはかけ離れた活動である。また、自発的に受け入れられた特定のルールの支配や時間的・空間的な拘束が必要であり、それらを受け入れ行った先には、緊張や喜びなどのさまざまな感情が伴い、またそれが非日常的な活動となっているのである。

(4) スポーツにおけるホイジンガの遊びの概念

前述の通りホイジンガは、「人間文化は遊びのなかにおいて、遊びとして発生し、展開してきた」と述べている。彼の遊びの概念によると、文化の一つであるスポーツは遊びから生まれたことになる。スポーツ基本法の前文に掲げられている「スポーツは世界共通の文化である」は、遊びを基調とした文化とスポーツのあり方の関係性を示したものと解される。

ホイジンガは遊びとは遊びそのものであり、遊びのおもしろさが遊びの本質であるとし、「おもしろさは、どんな分析も論理的解釈も受けつけない」⁴⁾とまで述べている。ゆえにスポーツの本質は、何をおいてもおもしろさに尽きるということになる。ホイジンガは、遊びの形式的特徴である自由な行為とおもしろさを求めるスポーツを妨げる状況に警告を発している。例えば、「近代社会では、スポーツはしだいに純粋な遊びの領域から離れていく」⁵⁾や「現代社会においてスポーツは本来の文化過程の脇に外れて位置」⁶⁾していると述べている。オリンピックや国際競技大会の政治的、功利的な行為が現出してきたところに現代スポーツの病理的現象を予言しているのである。

ホイジンガが指摘したスポーツの本質を妨げる原因を取り除くこと、つまり遊びの復活、遊びの再生によりスポーツの未来が拓けてくるのではないだろうか。この課題は世界的規模の難題であることは言うまでもない。ホイジンガの遊びの概念を再考するという原点回帰から始める重要性がここにある。

2. カイヨワにおける遊びの概念

カイヨワは、ホイジンガの遊びの概念である「ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）」理論を補い、拡張した。遊びの分類において、遊戯性と競争性に着目した4分類はカイヨワの成果である。

(1) 遊びと文化は同時並列

カイヨワは、ホイジンガの「遊びは文化に先行する」という主張に対し、遊びと文化を平等に扱い、遊びが先の場合も文化が先の場合もあるとした。両者の相互作用の結果として遊びと文化が存在すると捉え、両者の同時存在性、平等性を主張するものである⁷⁾。

(2) 遊びの定義

カイヨワは遊びを、それを支配する基本的衝動（人間の本能）が、安定することなくさまよい漂流する姿であるとし、遊びの定義として以下の6つを示している⁸⁾。

- ①自由な活動。すなわち、遊びが強制されないこと。むしろ強制されれば、遊びはたちまち魅力的な愉快的楽しみという性質を失ってしまう。
- ②隔離された活動。すなわち、あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲内に制限されていること。
- ③未確定な活動。すなわち、ゲーム展開が決定されていたり、先に結果がわかっていたりしてはならない。創意の工夫があるのだから、ある種の自由が必ず遊ぶ者の側に残されていなくてはならない。
- ④非生産的活動。すなわち、財産も富も、いかなる種類の新要素もつくり出さないこと。遊ぶ者の間での所有権の移動を除いて、勝負開始時と同じ状態に帰着する。
- ⑤規則のある活動。すなわち、約束ごとに従う活動。この約束ごとは通常法規を停止し、一時的に新しい法を確立する。そしてこの法だけが通用する。
- ⑥虚構の活動。すなわち、日常生活と対比した場合、二次的な現実、または明白に非現実であるという特殊な意識を伴っていること。

以上の定義はホイジンガの「遊びの形式的特性」とほとんど同じであるが、カイヨワは、④非生産的活動、⑥虚構の活動も遊びであることを加えている。

(3) 遊びの分類

カイヨワは、遊びを分類すべきであるとし、遊ぶ者の心理的態度をもとに4つに分類した（表1-1）。

表1-1 カイヨワによる遊びの分類

分類	説明
	(パイディア：Paidia ← → ルドゥス：Ludous)
アゴーン Agón 競争	現実の社会では不可能に見える出発点での平等を人為的に設定し、自力だけで、ルールに従って勝敗を争う。 (競走) (スポーツ競技)
アレア Alea 機会	自らはなんら努力することなく、すべてを偶然に期待することである。 (サイコロ) (カジノ)
ミミクリー Mimicry 模擬	模擬、仮装によって、一時的に自分の人格を捨てて別の人格を装い、そこに解放の喜びを味わうものである。 (人形遊び) (演劇)
イリンクス Ilinx 眩暈	つかの間知覚の安定をくずし、心地よいパニックを経験しようとする。 (ブランコ) (バンジージャンプ)

出典：R. カイヨワ（清水幾太郎・霧生和夫訳）『遊びと人間』岩波書店 1970年 pp.55、竹之下休蔵『プレイ・スポーツ・体育論』大修館書店 1972年 pp.151-152を参考に作成

この4つの分類のなかでスポーツは、①アゴーンが制度化され組織化されたものとして位置付けられている。また、遊びをパイディアとルドゥスという2つの極に区分し、自発的で本能的な遊び（パイディア）の発生から、規則的でより文化的意義と創造性を持つ遊び（ルドゥス）までの多様性があることを示した。

3 遊びとスポーツ

グートマン (A. Guttmann) は、スポーツとは「『遊びの要素に満ちた』身体的競争」⁹⁾であると定義している。またジレ (B. Gillet) は、スポーツを「遊戯、闘争、激しい肉体活動」¹⁰⁾と例え、数多く存在する定義のなかでも代表的なスポーツの定義を示している。前節までの繰り返しになるが、いずれも共通するのは、スポーツには遊びの要素があるということである。カイヨワの遊びの分類からも、「遊び」のなかにある競争という要素が「ゲーム」と考えられている。つまり、遊びのなかで生まれた「競争」の要素を持つものが「ゲーム」となり、激しい肉体活動を伴うことで「スポーツ」と呼ばれるのである。

遊びもスポーツも、そこででの経験が遊びの本質から遠ざかるほど、例えば体力や運動能力を高めることや強い心を養うための手段に大人がしてしまえばしまうほど、おのおの子どもにとってはスポーツをする意味を見出しにくくなり、ただ体を動かされる苦役になっていきかねない¹¹⁾。今日のスポーツはこういった意味で、大変危機的状況にある。なぜなら、スポーツの発展とともに、スポーツの本質である遊びの要素が失われつつあるからである。すでにホイジンガは、「スポーツは遊びの領域から去っていく」¹²⁾とスポーツの本質が変わっていく危機